

温古知新⑦ 〓とりかへばや物語 〓 1
笑顔礼讃西東

さくら草句会様(埼玉県・さいたま市) 2 〓 3

月虹の会様(東京都・八王子市) 3 〓 4

島田よし恵様(東京都・杉並区) 5

投稿作品 6 〓 10

心に残った作品 10

詠み人スクランブル(秋の夜長に読みたい本は?) 11 〓 12

ニユースあれこれ 13

お客様の「リレーエッセイ」 江葉恭子様 14

新潟ぶらり／旧齋藤家別邸／千歳大橋と月 15

詠み人の「リレーエッセイ」 俳人森賀まり様 16

10
October
Vol.52

詠み人応援マガジン

詩歌俳柳壇ニユース

哀愁
楽愁

食欲の秋、スポーツの秋、芸術の秋……とさまざまありますが、やっぱり「喜怒哀楽」は読書の秋! というところで、今回の「温古知新」では、ちょっと不思議な物語、「とりかへばや物語」のあらすじをご紹介します。

「とりかへばや物語」は、平安時代後期に成立した物語で作者は不詳。「古」とりかへばや」と、それを改作した「今」とりかへばや」とがあり、前者は散逸して、女性の手になるらしい後者だけが伝わっています。「無名草子」では、「古」に比べて「今」が物語の筋立てや文章表現などで非常に良くなっていると評価しています。そして、そのあらずじはというと……。

ある権大納言には、美しく顔立ちの似通った二人の子供がいました。一人は内気で女性的な性格の男の子、もう一人は快活で男性的な性格の女の子。このことに非常に悩んでいた権大納言は、二人を「とりかへばや(取り替えたいなあ)」と嘆いており、この天性の性格のため、男の子は「姫君」として、女の子は「若君」として育てられることになりました。

男装の女の子「若君」の才覚が知れ渡ると、天皇からぜひ出仕させるようにと言われます。天皇の命とあらば仕方なく、「若君」は男として元服し、宮廷に出仕。若くして出世街道を突き進みました。また、女装の男の子である「姫君」も尚侍として後宮に出仕を始めます。

その後「若君」は右大臣の願いでその娘四の君と結婚しますが、事情を知らない四の君は「若君」の親友宰相中将と通じてしまいます。一方「姫君」は主君女東宮に恋慕し密かに関係を結びます。そんな中、とうとう「若君」が宰相中将に素性を

温古知新⑦ とりかへばや物語

見破られてしまいます。そして、宰相中将と関係を持ちその子を妊娠。進退窮まった「若君」は、右大将に昇進直後、宰相中将に匿われて女の姿に戻り密かに出産するのでした。

一方、右大将の突然の失踪に、尚侍は右大将の捜索を開始。元の男性の姿に戻り、行方知れずとなっていた右大将を探し当てて宰相中将の下からの逃亡を手助けします。その後、二人は周囲に悟られぬよう互いの立場を入れ替え、都へ帰還。四の君と新右大将は睦ましい夫婦となっていくのでした。また、かねてより尚侍に心を寄せていた帝はついに新尚侍の部屋への侵入に成功。尚侍は男の子を出産します。やがて東宮は病気を理由に東宮の地位を退位。新尚侍が産んだ男の子が新たな東宮となり、尚侍は中宮に昇進。右大将は内大臣に。みんながそれぞれに幸福な生活を見出していった中で、ひとり大納言は(姉弟の入れ替わりに最後まで気付いていないので)成長する息子に母親の面影を見つても、恋しい思いが蘇ってきて、ためいきをつくばかりでした。

古くから読み続けられてきた作品ではありませんが、近代の一時期的批判に扱われていたことも。しかし、近年になってジェンダーの視点から再評価されました。当時の社会ならではの制約・お約束の展開はあるものの、本来的個人的性質と社会的に期待される役割との差異を浮き彫りにする本作は、ジェンダーという枠を越え、近代的小説に近い重要な要素を持つと言われています。

現代にも通じる物語。一度読んでみるのもいいかもしれません。
(古川久美子)

新俳句人連盟埼玉支部 さくら草句会 望月たけし・よし江さま

(埼玉県さいたま市)

新俳句人連盟埼玉支部として「さくら草句会」が誕生して15年。通常は顧問の望月たけしさんが講義を担当しているが、本日は所用につき、奥さまの望月よし江さんが講義を担当。「たけしはいないけど、遊びにきて〜」のお誘いにホイホイと、北浦和駅から徒歩5分の常盤公民館にお邪魔して参りました。

開口一番「暑い中、よくいらつしやいました」との歓迎に続き、男性4名、女性6名計10名のお一人おひとりが自己紹介をしてくださる。その後、よし江さんが「この方は一言もゲチを言ったことがない」「私、〇〇さん大好き



▲25周年を記念し9月に完成したばかりの「合同句集II さくら草」と再版のI

きな。「情緒あるいい俳句を作る方」「何でもできるのに謙虚で奥ゆかしい人柄」…等、お一人おひとりを褒め称賛し、最後には「全員が要、一人として欠けられない」と締めくくり、温かい空気が流れるのがわかる。

本日は、3句と席題「飴」1句の4句出句の7句選、うち1句を特選に。選句・披講が終わると、各人が特選でとった句の感想を述べる。

「特選は自分の作品以外から選んで、こういう思いで鑑賞させてもらいました、という感想を述べてくださいね。たけしは、18歳の頃、初めての句会で知らないままに自分の句を選んでしまったと聞いたらけど（笑）。一言ずつ声を出して帰りましょ」。

さて、開始と思ったところで「あ〜ほんと抜けてるんだから。木戸さんが暑い中いらしたらすぐに使ってもらおうと思ったのに」と、用意した冷たいタオルを首の後ろにあてがってくださいましたよし江さん。多少ぬるくなっていたのはご愛嬌、その心遣いがうれしい。

飴ひとつあの日を耐えて百日紅 東三
今でこそたくさんのお飴があるが、終戦当時は非常に貴重なもの。飴の有り難さを思い出し、いただいた／あの日終戦当時、食べ物のない苦しい時にたった一つの飴をもらい頑張った。そんな時、目についた百日紅の花が思い出にあるのか。8月15日も近く心にささった句。東三さん、この句いい句だから残しておいて。



▲お家がお隣りという方もいらして和気あいあい

一言の多きに悔いて麦湯濃し うた子
いつもと同じ麦湯なのに「一言余計なこと言っちゃったな」との後悔が、濃く苦い麦湯に生きている。

病院の白壁眩し蝉時雨 秀穂
少し寂しい句だが、退院できるのかできないのか、そういう不安な心境を詠んでいる／以前入院していた頃を回想しての作品と受けとめた。

熱帯夜逃れられずに待つ朝 和子
みなさんも経験あると思うけど、実感そのもので、採れる。

箱庭のナスへ曲がり今朝の汁 徳子
私も「箱庭」の句を作ったけど、この句があまりにもよくて負けた（笑）。自分で作ったものを自分で作って食べた、自然に触れたうれしさが良く出ている／「今朝の汁」がまたいい、一連の雰囲気全てわかる／箱庭の野菜は栄養不足で曲がったりする。「今朝の汁」で夫のへそ曲がりも含まれているのかなと、微笑ましい景も見える。

揚花火山下清のまぼろしと 栄子
揚花火を見ることで山下清の素晴らしい切り絵を思い出す、そんな感性を羨ましいと思った。

胃カメラの家宅捜査や涙汗 徳子
「家宅捜査」としたユーモアが目をついたが、ゴリゴリやられたのだからという状況がよくわかる。宝石でも見つかった？（笑）

東西讃礼顔笑

坐して聴くあの日を鳴いた蟬しぐれ 東三

特選には選ばれなかったけど5点句だから最高点。他の句も含めて東三さん今日は11点と大活躍ね。

これで終わりですが、先日、「※二句一章」という表現方法に目から鱗が落ちたので皆さんにもご紹介したい。胡瓜の 本音のところ曲がりたい

俳句は絶対5・7・5じゃなきゃいけないという訳ではなく、一言言いたいことがあった場合、「胡瓜の」5で切って、他の7・5は切らないで「本音のところ曲がりたい」とこれで一章にする「二句一章」という表現方法が昔からある。

俳句だから5・7・5、短歌だから5・7・5・7・7、そればかりが頭にある、言いたいことが表現しきれないということではなく、他の人がどういうふうに受け止めるかも勉強になるから、まずはいろんな形でやってみることが大事。自分なりに納得した作品で点が入ればうれしういが、得点は問題じゃない。どうしてもこういう句が作りたいと思う作品なら、点が入らなくても大事に残してほしい。その俳句こそ、日常描写としての日記がわりになる。

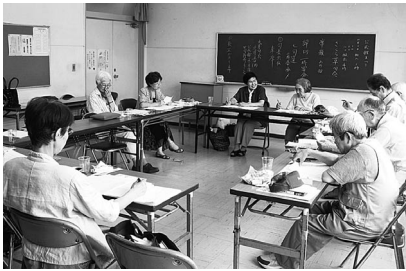
※「二句一章」↓相互に関連がない二つの事象やイメージを組み合わせ一句に仕立てることで、二つの概念が融合して一章を形成するという考え方。一句の中の詩的世界を大きくさせたり、存在を強く印象づけたりと新しい世界を現出させる方法論。5・7・5、57・5、7・55など。



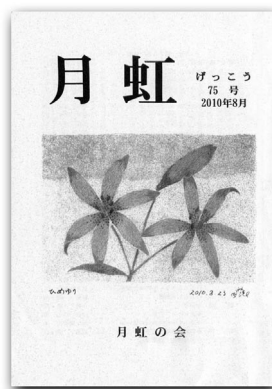
▲「二句一章」の解説をするよし江さん

■「極力フリガナはふらない」「俳句は品性が大事」と、俳句の基本を押さえながらも「さくら草句会」という楽しく俳句を学べる場づくりのため、陰になり日向になり八面六臂の働きをしているよし江さん。ご本人は意図しなくても、俳句と会員へのあふれる想いから、厭うことなく自然と口が動けば手も動く。「だって500円握りしめてこの会が生きがいつていう人がいるんだもの」。会員のお一人は「私より若いのに、頼れる肝っ玉母さんのような人よ」と。お互いが意気に感じる相互作用がこの会の真骨頂であり、長続きする秘訣と見てとれた。

(木戸敦子)



高田馬場駅から徒歩5分、平日は出版社の事務所となつているマンションの一室で、隔月に行われる「月虹の会」の歌会にお邪魔してまいりました。



▲隔月刊の『月虹』8月号

手際良く机と椅子を並べ替え、広くはない一室に14名が頭を突き合わせてひしめきあう。短歌を学ぶために、駅からのあの大勢の往来をぬけ、午後二時にひっそりとこの一室に集ってくることに、不思議な感覚を覚える。

手順としては、事前に提出し『月虹』に掲載されている一人7〜15首の作品を合評すること。事前に各人で選んでいるためスツと合評に入る。掲載順に自分の歌を読み上げ、一人の歌につき二人だけが選評を述べ、それ以外の方はいいと思った歌を2〜3首あげ、その後は自由に気付いたことを話し合うというスタイル。

ポウツと正午を告ぐるサイレンの鄙びし音の郷愁が好き

「ポウツ」という擬態語がよくわからなかった／2007年の短歌研究の評論新人賞で「擬態語はもう限界じゃないのか」という意見が評価された／臼井吉見は「擬態語は表現ではない、幼稚語だ」と言ったことがある。

鬱陶しいを辞書練りながら確かめて恋文書きたる彼の日なつかし

恋文の中に鬱陶しいが入っているのがおもしろい／時候の挨拶なのか、本文に出てくるのか？／その辺はさうと流してください(笑)。

姿と花われの好める木瓜の木に尿する犬をけさも見てけり

けりに重さを感じた／「て・けり」で意味を強めている。「見てけり」の「て」は完了の助動詞「つ」の連用形で「見てしまったな」という感じ。

日当たりの西の郭に咲くすみれ 男の生の荒さを思ふ

遊郭のこと？意味がわからなかった／家の近くの茅ヶ崎城址で、荒ぶる男たちを想った／どうして西？／東でもいいけど字が余る(笑)／意味ありげに思えた。



▲代表の鮫島満さんは元国語の先生



紫陽花の学名ハイドレインシア水の器と知りてうべなう

ハイドレインシアが紫陽花の学名とは知らなかった／「水の器」という意味の学名で、確か正式名称はハイドレインシアオタクサ。オタクサはシーボルトの愛妾「お滝さん」を思んでつけた名前とか／色々勉強になります。

鬱の字に見えなくもない過密なる筆運びして紫陽花に雨

見立てがユニーク／鬱は常用漢字に入ったが、一番使うのは十代で六十代が一番使わないと新聞に出ていた／さつきの恋文も十代かしら…(笑)。

一杯のビールをグーツと飲み切るが今日一日の至福のきはみ

至福のきはみでおいしさが伝わってきた／至福中の至福と思つて採つたが、理屈を言えば至福＝極まることだからダブっている／午前ゴルフに行き、午後またゴルフに行き、帰って飲むその何とも言えないビールの美味し

さを詠った／今回の一連の歌はバラエティに富んでいて、古い全開といった感じ／古いの極みだ(笑)／ゆっくり極まってくださいね。

公園を角まで行かず横切れば三角形の性質③
わかるような気もするが理解できなかった／それではご説明します(笑)。三角形の性質4つのうち③は「三角形の二辺の和は他の辺より大きい」／日常よくやっていることだね。飛び板は板ばねにして勇氣ある人をプールの深きに放る

水苦手でしたよね？知っているから「勇氣ある人」と詠んだのが納得でありおもしろい／今でも釣りに行く際、妻に「風が吹いて帽子が飛ばされてもまた買ってあげるから取りに行くな」と言われている／うちなら逆に「取りに行け」って言われる(笑)。

◎評価の高かった各人の歌

評価され売りに出さるる山田家のひっそりとして幟はためく 桜井範子
山田家がどういふ家なのかはよくわからないが、ひっそりとした佇まいを感じた。

十年の旅券をとるにいささかのためらひあるを妻にかくせり 小林勝
かいわれと水菜の束をすぎおり土の気配の一片なきに 葉月ひさ子

「土の気配」という表現が気に入った。最後の「に」が妥当かどうかはわからないけど。

やくもたつ いづものくにの さかみちの くだりあたりに かみさまがる 横山鈴子

他の歌もオールひらがなで、内容

を理解するのにが時間かかるが、みんないい歌のような気になる(笑)／さつき僕の歌をわからないとおっしゃったけど、そういう意味でこの歌もわからない(笑)、でも断言したところが実にいい。

湧き出づるただそれだけの温泉の街に足湯しぬくもり帰る 成島哲子
先月、年次大会でいわきの湯本温泉に行ったことを、素直にそのままに詠んでいる。

伸び初めし苦瓜のつる宙泳ぎよすがとならむ物を探れり 山口京子
おじぎ草に母が触るれば幼児も真似して触るる祭りの店頭 駒ヶ嶺泰秀
うねりつつ啼きつつ海を渡りくる風のごとしも 鳥唄を聴く 八幡道子
抱へ持つ草このごろ少なきを刺身盛り合せ買ひて思ひぬ 佐藤絃子

風呂敷も使わなくなり、大切なものを胸のところに抱えることがなくなった。見逃せば歌にならない行為を上手くまとめている。



▲延々5時間の歌会後もスッキリの面々

あざやかなる黄色の水かき並べ立つかもめはどれも海を見ている 秋山逸穂
安全で楽しいときに囀るとだれが小鳥に聞いたのだろう 保坂征子
これを詠んで、作者は「やっただぜ」と快哉を叫んだのでは。

竹釘を木板に打てる音柔く表具屋の棚に猫むりるき 鮫島満
職人の打つ柔らかい竹釘の音と猫の眠り、猫好きにはたまらない歌。
大黄河対岸は見えず滔々と流るる岸にひまわりの咲く 水上信子

■男性陣は、元教師という方が多く文法に關してもきつちりと指摘する。一つ言葉を発すると新たな言葉と知識が上乘せされ、談笑の体をとりながらも興行きのある教養が滲みでる。海外に国内にと旅する歌、日常の繊細な事象に目を向ける歌、紫陽花に關して、あるいはバネに關して何首も詠う歌：色々な試みがなされる。かつての師弟關係あり、隔月で仙台から上京する方あり、それだけの吸引力のある魅力あふれる会だった。(木戸敦子)



▲散会後も短歌談議は続く…

東 西 讚 禮 顔 笑

島田よし恵さま

(東京都・杉並区)



▲お手製の2つのHPを持つ島田さん

本年5月、夫、島田至さんの一周忌にあわせ『木霊狩〜島田至遺稿集〜』をまとめた島田よし恵さんにお話をうかがいました。

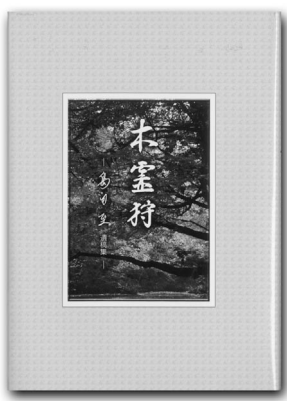
■大変な労作ですね
主人は、大学の頃から同人誌に寄稿し始め、社会に出て多忙を極める傍らも続けていました。大変な勉強家で一日に300ページの読書を課し寝床、トイレ、書斎と読む本を分けて3冊並行して読み、欠かさず読書日記をつけていました。メカには全く疎かったのですが美術品の鑑賞、植物、昆虫、寮歌、麻雀と趣味は幅広く、よく「裾野を広くしないと物書きはできない」と言っていました。

■出版に至った原動力は？
散見する原稿をいつかまとめた、という密かな楽しみを励みとしていた

ことを知っていました。費用もかかるので遠慮していたのですが、転勤や引越しが多かったのに、原稿だけは慎重に保管されていたことも後押ししました。だから、追悼集のようなものではなく、本人を主役にした本人の作品だけの本にしたかった。校正で何度も読みながら、改めて夫の心の内に入り込んだような気がして、彼は永久にここに居ると思えました。

■作品以外はよし恵さんが？

私はパソコン教室で教えていますが、「あなたの本を作るののために…」と云ってはパソコンやソフト、一眼レフやレンズをねだっていました(笑)。出版にあたっては手書きだった原稿をタイピングし、全くの素人なのですが、表紙カバーの装丁をしました。私の撮った写真の中から、夫が気に入ってくれた一枚をフォトショップで加工やデザインをしました。約束だから。でも、まさかこういう経緯で夫婦合作になるとは思いませんでした。夫は仕事も趣味も全力投球、悔いはなかったと思います。ただ、リタイア後のライフワークとしていた「きのこの歴史と民俗」に関しては、茸の観察・採集から、文献にあたることおよそ千冊以上。同人誌に寄せ



▲A5版で400ページ弱の大作

ていたものの再編纂を試みていましたが、力尽きてしまいました。昨年9月には今年中にこれを完成させると言っていたのですがー。

■きのこの研究ですか

学術肌でしたから研究者になつて何かを極めたかったのかもしれない。現役の時も土、日はやれ山梨だ、群馬だ、とお天気に関係なく毎週片道100キロくらいの道のりを出かけました。私は運転手。夢中になると手がつけられないんですよ。体力的に山に登れなくなつてからは、夫専用のパソコンを買った。麻雀専用で設定しマウスの使い方の特訓。インターネット麻雀を教えたら、すっかり夢中になりずいぶん楽しんでいました。グレーのマウスが人差し指のところだけ白く変色するほど…。

■1年という短時間でよくまとまりましたね

私も今年古稀なの(笑)。何が起きるか分からないから、早くまとめようと思つて。それに、主人が遺してくれたものは、私のためにも本人のためにも有効に使うのが一番の供養になると思ひましたので。だからこれでスッキリ。この本を借りて読んだ方が、「再読に値する本、手元に置いておきたい」と言つて所望してくれたり、「昨今の芥川賞作品よりよっぽどいい」と言つてくださる人もいて…。本人に聞かせたかったし、この言葉が欲しかったんだろうな、と思います。

こうして本にすると国会図書館に納本していただけるので、仕事、家族以外にもう一つの彼の生きた証がこの世に存在するのがとてもうれしいです。

■島田さんご自身これからは…

主人の買ってくれたパソコン、一眼レフがこれからの私の伴侶です。時々発明にも首を突っ込み、お蔭さまで適度に多忙でこれらが生きがいです。発明は昔から工夫することが好きだったので、赴任していたギリシャが不慣れた国で、元々の工夫気質に火がついた(笑)。帰国後発明の会に参加するようになり、出願は教えてもらつて自分自身でしました。スカーフを留めるクリップが一番の発明品、特許もとれ一時はかなり売れました。これをきっかけに夫は私の道楽を認めてくれました(笑)。発明の友だちと発想のお披露目(笑)も楽しみの一つ。寂しくないと云えば嘘になるけど、留まっていたらダメね。主人はお墓じゃなくてこの本の中にいると思つています。いただいた貴重な時間を有意義に使いたいですね。

★かつては原子力関係の会社に勤め、コンピュータのプログラミングをしていたという才媛の島田さん。現在は高井戸パソコンクラブを主宰し、23人のメンバーをサポーターしているほか、撮影ポイントへ東奔西走、日常生活でのひらめきと工夫に夢中になるという。言語明瞭にして、日々の充実ぶりが伝わってきて、聞いているこちらも気持ちがいい。ちよつと寄つて行くので…と「ピツクカメラ」に消えていく島田さん、毎日の生活にも工夫を凝らし日々新たにあらに違いない。(木戸敦子)

投稿作品

※今月も、みなさまから沢山のすばらしい作品を投稿していただきました! 今後も、みなさまの投稿をお待ちしております。次回掲載分は11月15日(月)締切です。

俳句

- 1 盆送り浜辺ただよう茄子の馬
三津木俊幸(千葉県)
- 2 現実にはひきもとされて盆賀明け
村木尚(新潟県)
- 3 笹舟を浮べてみたし天の川
檜山とり子(東京都)
- 4 子の帰る時を計りて水を打つ
小西四郎(東京都)
- 5 草むしり孤独の中にある自由
中野勝子(鹿児島県)
- 6 里神楽筵二枚で身支度す
津田忠彦(岡山県)
- 7 いつの世も命大事と秋の月
原田かずゑ(千葉県)
- 8 朝露や野菜作りの通ひ道
湯澤五郎(長野県)
- 9 東海の砂に網目のメロン地図
森白樹(東京都)
- 10 兄の屍まだ海の中敗戦忌
吉村筑紫(埼玉県)
- 11 残りとは言はれぬ程の暑さかな
増田信雄(埼玉県)
- 12 走り蕎麦孫にも塗す打ち粉かな
星野三興(新潟県)
- 13 膝抜けのジープン闊歩街薄暑
乾久子(滋賀県)
- 14 水茄子の切り口真つ白ロック酒
星一子(神奈川県)
- 15 一献の酒に始まる生身魂
野木宗信(奈良県)
- 16 せーらぎの音の育む風涼し
渡辺嘉幸(東京都)
- 17 手作りの揃いの麻で墓参り
佐藤佑子(福島県)
- 18 平凡に生きて夫婦の冷奴
大場きよし(宮城県)
- 19 妹もやもめになりぬ孟蘭盆会
佐野和彦(静岡県)
- 20 でで虫の己に籠る思慮深き
竹本美美子(新潟県)
- 21 新潟の灯影一つの島の影
大谷茂(埼玉県)
- 22 ちぎれ雲色なき風に流さるる
三ツ木宗一(東京都)
- 23 還らざる父六十五年魂迎
有坂馨園(福島県)
- 24 百才の母の黙禱終戦忌
佐瀬チエ子(神奈川県)
- 25 渡り鳥次の住む地に帰り行く
河合ヤスエ(大阪府)
- 26 届かざるところに熟れて柔いちこ
平山千江(岩手県)
- 27 余部を渡る汽笛や星月夜
田中稔(鳥取県)
- 28 秋口の白神山地風の黙
菊池シユン(青森県)
- 29 ほととぎす啼くや久女の亡き朝も
坪田勝秀(鹿児島県)
- 30 送り火や胸の奥にもある奈落
井原毬子(東京都)
- 31 門川に秋鍬ひとつ耕土待ち
小林敏宏(長野県)
- 32 盆の灯に歳時記めぐり父偲ぶ
磯山陽吉(東京都)
- 33 夏水仙師に褒められし事もあり
浜田蛙城(静岡県)
- 34 左手に夏帽抱へ入院す
小島岳青(新潟県)
- 35 白もまた燃える色なり夏椿
北村純一(神奈川県)
- 36 手術した眼に夏座敷塵埃
富樫和子(山形県)
- 37 翡翠の釈迦はゆつくり風になる
木山杏理(東京都)
- 38 萩こぼる道を好みて一人行く
藤田三四郎(群馬県)
- 39 火の波の寄せくるごとし曼珠沙華
吉田未灰(群馬県)
- 40 息災に晩年きたる残暑かな
内河邦久(東京都)
- 41 蟬り解き難き日の半夏生
浦橋克行(兵庫県)
- 42 法師蟬鳴くころ今だ就活中
佐野しづ子(愛知県)
- 43 辻々に老いも若きも踊り出す
忍正志(兵庫県)
- 44 汗しとど行き着く果ては峠茶屋
神作洗江(埼玉県)
- 45 跳びながら父の影ふむ月の道
長峰正晴(千葉県)
- 46 飛び魚がまじめ顔して飛んでゆく
藤本由美子(兵庫県)
- 47 つくづくと孤独死思ひ四葩剪る
梶鴻風(北海道)
- 48 散らばりてすずめ遊ぶや夏の芝
松本正(千葉県)
- 49 人生は一炊の夢生身魂
田島星景子(宮城県)
- 50 ひそと鳴きひそと消え去る昼の虫
椋本望生(大阪府)
- 51 氷水ラフマフとは何ぞぞ
湯浅芳郎(岡山県)
- 52 冬ざれてささくれし身の弱さ知る
池戸喜美子(長野県)
- 53 山月に群馬散りぢり影おとす
須澤重雄(長野県)
- 54 夫の血を湧かす高校野球夏
大阿久雅子(東京都)
- 55 蚊に刺され俺の足から父の血が
辻升人(東京都)
- 56 合歓の木や川の瀬音に眠りをり
武市愛子(大阪府)
- 57 少し老い二十年目の墓洗う
清水喜代子(岡山県)
- 58 生かされて泥鰌売らるる店の奥
小林七重(新潟県)
- 59 黙禱は時報に合はず終戦日
川崎洋吉(福岡県)
- 60 猫じやらしったつた一人の停留所
山川みどり(山形県)
- 61 ゼロ戦機閑かに語る終戦日
千代田栄次(東京都)
- 62 ひとりじゃないみんな見ている大花火
野村牟人(東京都)
- 63 終戦や戦死せぬ身に米寿とは
加藤三陽(埼玉県)
- 64 秋はじめ行間読めぬ空の色
福岡悟(東京都)
- 65 スローなフギが夜のレタスを起こしくる
諏訪杜夫(埼玉県)
- 66 立葵ふる里さらに遠くなり
堅田秀子(東京都)
- 67 終戦日眼裏にあるおさげ髪
堀木和子(大阪府)
- 68 水替への目高流しに跳ねにけり
津布久信雄(東京都)
- 69 音立てぬ夫の帰宅や虫時雨
今井勝子(新潟県)
- 70 産土の石碑に刻む月一句
春口蓮男(静岡県)

- 71 朝顔の青空の色まず咲きぬ
伊藤みさ(静岡県)
- 72 てのひらに刺すとげ嬉し胡瓜もぐ
園部正次(大分県)
- 73 夕立の葉の一滴に涼を知る
木下精(大阪府)
- 74 悔しさの父の涙や終戦日
油谷郷史(兵庫県)
- 75 穂揃ひて田面の風の重さかな
安藤まこと(岩手県)
- 76 各月や猫ともどもの独り居に
中嶋清子(佐賀県)
- 77 内視鏡するりと抜けて涼新た
紺谷睡花(東京都)
- 78 明日帰る孫と線香花火する
平賀田鶴子(愛知県)
- 79 杉を伐り自分史富士へ埋蔵す
寺岡文生(静岡県)
- 80 突き出して銀波きらめく心太
寺尾令子(東京都)
- 81 水蓮のまばたきさきり母のいて
棚橋麗末(東京都)
- 82 昼下り母のうた、ね青簾
大久保アヤ子(東京都)
- 83 百合の花山笹鬼と咲き競ふ
李保文彦(神奈川県)
- 84 秋晴れや響く棟上げ祝い唄
阿部澄江(宮城県)
- 85 冠らねばじいは遊ばぬ夏帽子
井上静夫(栃木県)
- 86 筍の皮むき戦後思ひ出す
伊藤修敬(三重県)
- 87 まぬけ節りズムに酔った遠野夏
杉村美保子(岩手県)
- 88 キリギリス蝗も打連れ畑野守
和田猛(兵庫県)
- 89 皺手取り結ぶ白魚神無月
佐伯セツ子(香川県)
- 90 帰省の子いとこ同士の湯浴みかな
山本直子(大阪府)
- 91 里山の低き家並や雲の峰
村上千代(大阪府)
- 92 顔近く群れ飛び去りし秋あかね
中村和弘(愛知県)
- 93 草食系色白小顔で夏を越す
布目雅之(埼玉県)
- 94 口元をちゅつと結んで軒燕
居原田連星(大阪府)
- 95 戸を開けて父の居そうな夏座敷
要俊江(福岡県)
- 96 桐一葉風に誘われ旅支度
藤田君江(東京都)
- 97 畑のものを採れてピリ辛夏料理
仁科美代子(長野県)
- 98 少年の汗喝采にむかへられ
堀たかこ(大阪府)
- 99 一人ゐることに慣れたる秋の夜
貝沼とし子(愛知県)
- 100 夜濯に繕ひに母ユラフォーム
高野春枝(埼玉県)
- 101 蝉の声被爆ピアノのコンサート
小山たけし(埼玉県)
- 102 残暑見舞してそよ風を呼び起す
岩村昇(神奈川県)
- 103 七夕や子ごとに担ぐ願ひ竹
谷川利子(愛知県)
- 104 便りする相手また減るかもめーる
吉野成行(愛知県)
- 105 柏餅懐かしい味母愛し
五味田幸夫(栃木県)
- 106 真剣に来年の夢八月尽
中川平治(東京都)
- 107 仏壇の兄は童顔長崎忌
竹内ハヤ子(埼玉県)
- 108 背恰好亡母かと一瞬秋日傘
中野豊彦(東京都)
- 109 のばしきつて風船ガムの残暑かな
小野寺裕子(宮城県)
- 110 父帰る我家泊三日新の盆
早川述史(愛知県)
- 111 驟雨来し店をたためる銀杏路
齊藤安弘(神奈川県)
- 112 ピカソ見る乙女の服の日輪草
副島加代子(宮城県)
- 113 その艶を葉陰に見せて秋茄子
吉村充治(埼玉県)
- 114 葛咲いて古井戸の跡隠しけり
佐藤美美子(神奈川県)
- 115 雪溶かし音たて流る白馬村
木村俊彦(奈良県)
- 116 過労死の如くパサリと桐一葉
鏡たか子(山形県)
- 117 生涯を吾が庭で終え蟬むくろ
鰐部好三(愛知県)
- 118 茸狩りバスの皆みなお年寄り
高杉杜詩花(北海道)
- 119 月見草夕べの色に咲きいでし
能條憲夫(神奈川県)
- 120 あわだちが三四郎池蔓延りし
福田和子(東京都)
- 121 生ぜしも死するも独り夕端居
佐藤茂三郎(千葉県)
- 122 新涼の窓辺の椅子を去り難し
中野博夫(埼玉県)
- 123 カツ食つて今日の残暑に立ち向かふ
今井岩夫(千葉県)
- 124 山小屋の誰が替へたか百合の水
西村けい(茨城県)
- 125 日盛や検針員の黙々と
水川聖子(埼玉県)
- 126 人垣を潜りたちまち祭の子
川口襄(埼玉県)
- 127 百選の郷の漁火天の川
堀田寿美子(北海道)
- 128 九年母や句集の上に老眼鏡
本間七窪子(山形県)
- 129 天幕に風の大波ほおづき市
木村貞恵(静岡県)
- 130 秋の空真つ赤に染めて日の落ちぬ
高橋透(兵庫県)
- 131 蟻登る白き砂丘やトツプレス
大井光隆(神奈川県)
- 132 もうとうんぼ見れぬ田川となりけり
山岸伊久雄(東京都)
- 133 背のびした墨絵河童の我鬼忌なり
矢野絹枝(東京都)
- 134 雨止むを待っていたよな蟬時雨
岩永登茂子(大阪府)
- 135 鱧料理聞こえ出したる笛太鼓
西川孝子(奈良県)
- 136 遠花火了るや青き夜を呼ぶ
羽根田明(神奈川県)
- 137 この坂の勾配が好き青ぶどう
竹澤茂子(大阪府)
- 138 たまり水こつんとあたる鬼やんま
北野耕兵(千葉県)
- 139 今朝の秋窓よりの風疑はず
上谷すみゑ(神奈川県)
- 140 天草干す香に郷愁を覚えけり
木村真澄(埼玉県)
- 141 こ、ちよい朝のめざめに匂う秋
秋山貞治(千葉県)
- 142 愛されず愛してばかり遠花火
村松知津子(大阪府)
- 143 鯛を聞くとや一人の台所
佐藤信(神奈川県)
- 144 義理いくつ果せし安堵残暑かな
清まさし(静岡県)
- 145 巢立鳥やはり一人となりけり
五十嵐勝敏(新潟県)
- 146 あとずさりしてゆく昭和終戦日
鈴木蝶次(宮城県)

- 147 ひやくじつこう枝八方に花だらけ
野中よしみ(神奈川県)
- 148 傘寿まだか細き逆さ今年竹
菅井文男(新潟県)
- 149 風葬仏八千体の冷まじき
炭崎博(滋賀県)
- 150 残暑と言へど猛暑日猛々し
田野井一夫(栃木県)
- 151 焼茄子は舅の好物長寿箸
今井温子(奈良県)
- 152 露の世や宇宙に人の住む時代
根岸五郎(千葉県)
- 153 鉄線花朝の光りの中に咲く
秦幸子(福岡県)
- 154 盆踊り伸びる腕と直ぐな腰
小泉峯子(東京都)
- 155 白百合のやや傾きて憂ひなし
小井寒九郎(三重県)
- 156 入道雲名古屋の城を包みを取り
早矢仕邦夫(愛知県)
- 157 夏帽子並んで似た者同志かな
萬濃その子(千葉県)
- 158 花火消へ新たなる闇天空に
松木建二(東京都)
- 159 青大将偏西風の大蛇行
井田由利子(宮城県)
- 160 手拭をひよつと肩かけ夕端居
長島保子(東京都)
- 161 夕立雲なぜに避けるの仰ぐ度
藤井春三(埼玉県)
- 162 咲き分ける手塩にかけしつまくれな
掘井和(神奈川県)
- 163 脳細胞狂いはないか秋暑し
鈴木与平(宮城県)
- 164 生きたくて海が見たくて飛ぶホタル
池田岬(埼玉県)
- 165 夕暮れの風をたもとに初浴衣
重原昇(新潟県)
- 166 星月夜遠き国より初メール
北嶋八重(京都府)
- 167 駄菓子屋のどれも百円小鳥来る
高松ゆか(神奈川県)
- 168 語り得ぬままに別れて夕月夜
古谷力(東京都)
- 169 天の川いのち惜しめと書く便り
安達輝美(山口県)
- 170 地の熱のさめぬ中空夜半の月
近藤美好(新潟県)
- 171 存分に生きし余生や秋高し
小林紀美子(東京都)
- 172 格式の社家の前川水澄めり
池本勇(大阪府)
- 173 今更に過去の悔いなどレモン切る
大窪美代子(大阪府)
- 174 いつのまに表札消へて秋彼岸
橋本まこと(栃木県)
- 175 うなじ過ぐ風のありけり今朝の秋
木田亜津子(神奈川県)
- 176 山の湯の秋草ゆらしをみな来ぬ
堀井酔人(茨城県)
- 177 スーパーの秋刀魚値上がり妻の愚痴
延原令岱(岡山県)
- 178 絵手紙に風描き足さむ夜の秋
増本和子(千葉県)
- 179 ひとり旅夏をたたんでバスに乗る
仁藤ひろじ(埼玉県)
- 180 告白を聞きて見送る秋日傘
岡村君枝(茨城県)
- 181 太陽の海に素潜ぐる子わつぱかな
森崎榮久(岡山県)
- 182 水打てば石が火照をはね返す
廣瀬喜代子(岡山県)
- 183 卒業の天気の良いくてなを辛し
美濃部紘三(新潟県)
- 184 白露にはピンとこないよこの暑さ
岸田晴代(奈良県)
- 185 鯨の見得を切つたり夏の月
三浦八千代(千葉県)
- 186 黄金の絨毯敷き秋の里
出井静枝(三重県)
- 187 さんま食うてなんでも言る友とある
若林卓宣(三重県)
- 188 里山のみどりまだ濃き残暑かな
鈴木みえ(長野県)
- 189 夏衣病みいる妻の着換かな
畑克明(山梨県)
- 190 絆なき天涯孤独一千体
小俣英之助(大阪府)
- 191 朝つゆに蝉の声なき晩夏かな
楠本玲幸(大阪府)
- 192 石一つ足してさやけし水子仏
吉澤昌美(長野県)
- 193 ゆふぞらや馬具一つなき瓜の馬
新井竜才(埼玉県)
- 194 手花火の明かりに回る幼年期
大下志峰(福井県)
- 195 細腕を出して採血秋暑し
藤沢樹村(東京都)
- 196 存へて捧ぐ黙禱敗戦忌
野原香雪(北海道)
- 197 しあわせはいつも身近に茄子の花
山崎鶴恵(鹿児島県)
- 198 筆習ふ広告の裏虫の夜
神一男(静岡県)
- 199 相合傘そよると暮れる秋の浜
村上幸枝(山口県)
- 200 薔薇の中洞然として暮れなすむ
野中信夫(東京都)
- 201 日盛りをそよりとみせず竹の叢
須田洋子(埼玉県)
- 202 ガス灯を灯す運河や涼新た
柴田恵美子(北海道)
- 203 懐きそむ空と大地や盆の朝
安部龍太(山梨県)
- 204 また一人佳き人が逝き蝉しぐれ
中山日出子(大阪府)
- 205 大いなる季節の扉秋の朝
宇田川正雄(埼玉県)
- 206 晩年の開花と言はれ流す汗
柳澤京子(宮城県)
- 207 オイ貴様の四倍生きて盆の月
行方素芳(東京都)
- 208 原爆忌人の形の黒い雲
針ヶ谷里三(東京都)
- 209 猛暑過ぎ庭の樹木に疲れあり
塩田澄子(千葉県)
- 210 町なかに猿の出没秋暑し
杉浦俊雄(静岡県)
- 211 てのひらに遊ぶえんぴつ夜の秋
高垣勝代(大阪府)
- 212 向日葵の影が知らせる花時計
西口東治(大阪府)
- 213 ふるさとや母七回忌蝉しぐれ
針生清(千葉県)
- 214 噉の白露任す足裏清々し
関谷秀二(愛知県)
- 215 足おもき傘寿の兄と墓参り
駒場京子(神奈川県)
- 216 エゾシカの緑草のどか木々の間に
長谷部喜代子(大阪府)
- 217 流し雛片手拌みに波の上に
江見太郎(岡山県)
- 218 根の国へ瘦脚伸ばす昼寝かな
岡本伸(埼玉県)
- 219 背の汗に風の労ひ賜りぬ
石川郁子(埼玉県)
- 220 都会の子祖母と遊ばず蛍追う
村田洋子(山梨県)



短歌



221 御巢鷹に二十五年の時経りて山は緑に鎮魂の風

大橋恒次(新潟県)

222 いたく孤独に嘆きを寄せ来し君の封書古き文箱に今も秘め持つ

木暮珣子(群馬県)

223 学園紛争真つただ中の我思ふ權さんの追悼式の今日

今井忠一(東京都)

224 人のふりみてわがふりなおせしみに老いても常に美しく生きむ

田邊美代子(三重県)

225 ふるさとの兄より届く秋の荷の薫切らずにいねいに解く

藤原昭三(滋賀県)

226 春よ来いと君は厨に腕振う包丁を引く大根白し

土屋喜雄(山梨県)

227 左ききの私は不便な自動改札おどろに抜けて都心へ消ゆる

久保和友(滋賀県)

228 広島原爆ドームかけろひて幾万の霊いまだ彷徨ふ

野別忠孝(埼玉県)

229 南無二十九万頭の殺処分牛にも豚にも罪あらざるに

黒澤正行(福島県)

230 垂乳根の母より離れて幾歳ぞ二十三才若くして逝く

百花清(埼玉県)

231 三日月の冴へる鎌持ち夜叉走る邪気を露はに北斗が敵か

鈴木清美(愛知県)

232 義父植へし蜜柑満開に蜂寄りて周年かけて実の熟しゆく

小島秀雄(福島県)

233 女たちはおれをイケメンっていうんだ どうだおれはいい顔だろうっふっふ

梅澤鳳舞(埼玉県)

234 広島と長崎悼む原爆忌世界平和を切に願いつ

山本敏順(長野県)

235 古稀を越へ友は緑道身をまかせ我れは未だに商道探し

辻忠城(東京都)

236 眠れざる真夜にメールを打つ友のうから持たざる心のひびき

竹野紀子(東京都)

237 謂れなく命絶たれし幼子の母の胸恋ふ御霊いつに

渋谷清(埼玉県)

238 くれなるの詩集ひらけばかほり立つうた人たちが心のさやぎ

千木良宣行(埼玉県)

239 雨あがりさびしき陽差し背に受けて平城遷都の人群にゐる

高須孝(愛知県)

240 台風で猛暑はどこに高い空頭をたれる実りの季節

田村淳子(新潟県)

241 時の人心の目で見るピアニスト・ムソルグスキー「展覧会の絵」

西山悌三郎(高知県)

242 古稀過ぎて習ひ始めし煎茶の点煎雅の中に理の見ゆ

磯部力(新潟県)

243 呼びかけて応えが戻るその場所に夫ある現実確かなる幸

寒川靖子(香川県)

244 快復のきざしが見えるその姿野菜と共に夏草の中

森ふく(千葉県)

245 起きいでて顎の白髪も一三本抜くが 楽しみ朝のひととき

小暮昭司(群馬県)

246 愚かしや昨日はすでに過去なりていつまで怨む墓中の人を

小田佳代(和歌山県)

247 今朝も父は電動車に乗り水田を見まわりにゆく杖持ちてゆく

桑原謙一(群馬県)

248 わたしにはわたしの道がある筈と教へてくれる太陽なりし

安木沢修風(新潟県)

249 このところ頼に老眼度がすすみBに取り替ふシャーペンの芯

椎忠夫(神奈川県)

250 二十米の風速恐しベイブリッジ海の最中に吸い込まる如

大西敏正(神奈川県)

251 来し方の七十五年ふり返りひた有難き親族ともがら 佐藤政實(埼玉県)

252 夜の秋うだる猛暑を思いつつGBの負け反省のとき(GBリーグボール)

田中豊恵(新潟県)

253 漸くに着きし湯宿の天井の低きに思ふわが越し方を

門井美豫(埼玉県)

254 蝶を追いじゃが著掘るは初体験焔は幼の遊びの宝庫

野口初江(茨城県)

255 戯れにページをめくる古き日記なぜかときめく君のインシヤル

岩崎令子(大阪府)

256 古宿浮く一夜はらりと裾開く腿を紅染む窓抜く明月

濱田深雪(新潟県)

257 ひもじさはまずしさほどの苦ならねど書店をあとに秋空に酔う

米山孝志(東京都)

258 絡まりて生くる夏日に蔓伸ばす風船かづらは宙を夢見る

山口京子(東京都)

川柳



259 オブラート一枚分の嘘でした

黒田るみ子(徳島県)

260 ダイエットしたら却って肥えてきた

大江秋月(兵庫県)

261 名を知らぬ臓器移植に有難う

羽田桐柳(群馬県)

262 喜怒哀楽またアンテナが騒がしい

勢藤隆(群馬県)

263 老の身に何を求めや元気のみ

河合ヤスエ(大阪府)

264 別腹が実りの秋にスタンバイ

大竹憲弥(新潟県)

265 終戦日忘れぬために国旗揚げ

濱田イサオ(福岡県)

266 総理の座かけてカラスが白と言う

森本遊笑(兵庫県)

267 ありがとう嬉しく読んだ夏便り

近藤はつみ(福岡県)

268 蚊に食われ何で朝刊外で読む

石原学(群馬県)

269 目を閉じて浮かぶ母の手優しい手

中嶋秀次郎(埼玉県)

270 スポポン猛暑で夫は生れたて

南喜美子(千葉県)

271 簡単に手の内見せる野暮しゃない

高柳閑雲(愛知県)

272 喧しい蝉を転がす猫叱る

戸田英夫(愛知県)

273 絵手紙を書く気にさせた茄子の艶

藤沢健二(千葉県)

274 夏帽子ママに持たせて蝉を追う

工藤昌見(山形県)

275 未熟さをお墓石の父母に諭される

田澤宏(新潟県)

276 ケチじゃなくエゴなんですと胸をはる

岡本恵(茨城県)

- 277 物言わぬ土に声かけ種を蒔く
久本にい地(岡山県)
- 278 日本の個人番号統一を
大川聡(新潟県)
- 279 時どきは妻を気遣う勤の虫
鈴木義雄(福島県)
- 280 阿波と八尾の夫婦争い
奈倉楽甫(愛知県)
- 281 甲子園喜怒哀楽の垣塙かな
橋本世紀男(東京都)
- 282 老化と言う大きな壁に挑んでる
小山恵美子(大阪府)
- 283 秋彼岸終の一日をもて余す
阿部幸子(宮城県)
- 284 波風を紡いで咲いた夫婦花
大岩歌子(岡山県)
- 285 ケータイもまわり気になり声が出ず
松田義登(福岡県)
- 286 無月の闇に波の音死者の笛となり
長尾俊彦(香川県)
- 287 そりあわず老いてなお増す母娘のなさ
奥那於子(大阪府)
- 288 風鈴を鳴らして通る熱い風
藤沢今日民(千葉県)
- 289 今年ほどビールの美味い年は無い
岡弘子(埼玉県)
- 290 跡白し指輪はずしたくすり指
山崎一嘉(愛媛県)
- 291 エアコンも良いが廊下は垂熱帯
北村富士雄(新潟県)
- 292 愛犬の尻尾が指針健康の
大橋絵代(千葉県)
- 293 檜扇と教えてくれた花の友
中林恵子(大阪府)
- 294 ラーメンになると評論家が増える
中島久光(岩手県)
- 295 風鈴もこの暑さでは音もなくて
原田英一(千葉県)



8月号の心に残った作品

毎号募集しております。投稿作品で心に残ったものは？の問いに、たくさんのお返事をお寄せ頂きありがとうございます！
その中で特に多くの評価を集めた作品と、それを選んだ理由の一部をご紹介します。

《大賞》 185 牛たちの真珠のなみだ梅雨に入る

井田由利子(宮城県)

・宮崎県の口蹄疫の問題で初めての牛の処分、このニュースの度に涙しましたので
佐藤佑子(福島県)・「真珠の涙」に万感！牛たちの大写的画面では目を閉じていました
磯山陽吉(東京都)・時事問題をとらえて上手く表現している
清水代子(岡山県)・動物ながら天命を知っている様で哀れです
平賀田鶴子(愛知県)・動物として生命はある、涙も流れるであろう
中野豊彦(東京都)・私の郷里宮崎県の口蹄疫が痛ましいです
橋本世紀男(東京都)・宮崎県のみならず、牛の目はいつも泣いています
増本和子(千葉県)・家族の様に愛している牛が処置される。まさに身がつまされます
塩田澄子(千葉県)

【自句自解】
宮崎県内で流行していた家畜伝染病の口蹄疫は、梅雨に入っても一向に衰えず、余儀なく処分された牛たちのニュース

を聞く度に、どなたも胸を痛めた事でしょう。本来の役目を果たせず処分された家畜の、特に牛たちの事を考えずにはいられません。あのやさしい目の物言わぬ牛たちは、溢れる涙をこらえその涙の一粒一粒は宝石の如く、まさに「真珠のなみだ」となつて牧場一面を濡らしたのではないかと想像しました。

《俳句》

4 薫風や子に逆らはず従はず

井原穂子(東京都)

・本当におだやかな楽しい同居が思われます
檜山とり子(東京都)・現代を生きたる智慧を一句に上手に読み切っている
野別忠孝(埼玉県)・自立した生き方の決意あるいは今までの生き方に共感しました
富樫和子(山形県)・迷わず「いただきます」の一言。同感です
神作洗江(埼玉県)・親子関係を無難に維持する要諦が、さりりと示されています
川崎洋吉(福岡県)・私の今の生き方と同じ
竹内ハヤ子(埼玉県)・中高年の方なのでしようね。まだ御自分らしく生き抜こうとしている姿が伝わります
井田由利子(宮城県)・「逆らはず従はず」のころを「薫風」がなごませている
若林卓宣(三重県)・自分の人生です。子供にも自由にさせて来ましたから
柳澤京子(宮城県)

23 一握の恙の母の髪洗ふ

佐野和彦(静岡県)

・非常にせつない
平山千江(岩手県)・三ツの「の」でつなぐリズムに優しさがあり、男性であるのに感銘を受けた
園部正次(大分県)・お母さんのお年は何年でしょう？年をとると髪もうすくなりませんが恙なくいらつしやる御様子。一握に実感がこもっています
大久保アヤ子

(東京都)・さぞやお母さん幸せに思われたことでしょう。私ははなれて居たので少し出来ただけです
佐伯セツ子(香川県)・母の髪を洗ってやりたい。でも介護はしたく無い。私の思いです
大川聡(新潟県)・母の老が一握の髪によつて哀惜しむ気持が身にしみて伝わってきました
上谷すみゑ(神奈川県)・(恙の母の)に母への愛。想ふ心。胸に迫りました
村松知津子(大阪府)・髪は細くなつて来てもまだまだお元気なお母さま。姑をお風呂に入れた昔のことを想い出しました
仁藤ひろじ(埼玉県)・軽い病気のお母さんの介護をされて居られるのでしょうか？
「髪洗う」の季語にお母さんへの深い愛情が何われ、胸を打ちます
大下志峰(福井県)

《短歌》

207 忘れぬし黒い鼻緒の桐の下駄履けば

昭和の音が聞こえる

野木宗信(奈良県)

・昭和も遠くなりけりの感ひたひたとする
田邊美代子(三重県)・貧しい下駄職人だった父を憶い出す
黒澤正行(福島県)・同感です
渋谷清(埼玉県)・如何にも昭和の男を感じるので
堀井和(神奈川県)

《川柳》

252 定年後無趣味の男歩くだけ

藤沢健二(千葉県)

・私は逆に歩きながらいろいろ考えます。明日は何をしようと
松田義登(福岡県)・私も無趣味で金もなく散歩だけ
中島久光(岩手県)・然り。新しい事は三日坊主
杉浦俊雄(静岡県)・ほか

※今後もふるってご投稿をお願いいたします！

前回のアンケート

Q.秋の夜長に読みたい本は？
みなさまの回答を見ているだけで、楽しくなっています。

南総里見八犬伝と石田三成の史実 三津木俊幸／司馬遼太郎の島の城 BS放送「雷蔵の忍び者」を録画で見たい私が若い時に読んだこの小説が俄然読み返したくなりました 村木尚／百人一首解説購入済み 檜山とり子／「なんとなく」空青「藤尚子さんの詩集」黒田るみ子／ラジオ深夜便「ころの時代特選集」上・下巻 中野勝子／上田秋成のもの。「秋成の忌日と知らず両月読む」です 津田忠彦／高峰秀子 原田かずゑ／小千谷市千谷の／高井貫一氏の自費出版従軍体験記「命繋いで」大橋恒次／「百年の封印」新井克昌著「文芸春秋社刊」 木暮珣子／松本清張「点と線」湯澤五郎／亀井千歩子「小さな町小さな旅」山と溪谷社 森白樹／俵万智の小さいエッセイのようなツフトな本 今井忠一／坂の上の雲 吉村筑紫／太宰治の「人間失格」但し原稿（原本）を写して本にしている 増田信雄／川端康成 雪国 星野三興／短歌 田邊美代子／ユーゴーのレミゼラブル、何回読んでも新鮮なおもいが甦る。また近著声に出して読みたい日本語「集目」に耽読しています 藤原昭三／時代劇遠山の金さん 大江秋月／旅の本 乾久子／ゆつくり手許の句集に目を通したい 星一子／姜尚中著母オモモ 野木宗信／万葉集、芭蕉句集、司馬遼太郎の書籍 土屋喜雄／徳川家康 山岡荘八著 渡辺嘉幸／四谷怪談読みたくなりました。お右、伊右衛門位しか知りませんでした。羽田桐柳／「生きかた上手」著者日野原重明90才で現在内科医をつづけていると聞き、雪が降る前に読

みたい、松尾正一／浅田次郎「終らない夏」ちなみに連軍が占守島に進攻した昭和二十一年八月十八日は我が軍部隊への「停戦命令」がやつと発せられた日です 神田九十九／「1Q84」一二巻を読みましたが、変な気分にな。あと一巻!! 勢藤 隆／谷崎潤一郎 瘋癲老人日記 久保和友／凜として生きる男の作法 野別忠孝／終戦から65年日、私も65歳になり改めて戦争はなぜおきたのか考えてみたくその関係の本を読みたいと思います 佐藤佑子／軽い「野草」など絵の多いのが良い 大場きよし／万葉集 佐野和彦／1Q84 村上春樹が好きなので 若月理依子／芭蕉七部集 大谷茂／近藤富蔵著の「八犬実記」岩波文庫が今は絶版、目下探している最中です 三ツ木宗一／江戸東京千年の土魂を探る「その後散策したい」有坂馨園／宮城昌昌光著「青雲はるかに」奇貨居くべし」 百花清／井上田了 妖怪学全集 鈴木清美／源氏物語全集 佐瀬チエ子／虚子俳句問答 平山千江／窪田空穂全歌集 相馬竹浪／坂の上の雲 田中昶／余り読む機会はありません。俳句はつづけておりますが… 菊池シユン／良寛の世界 大竹憲弥／藤沢周年の作品ならどれでも可 坪田勝秀／道浦母都子の無援の抒情 崎田イサオ／源氏物語、俳句雑誌 井原稔子／一〇五円で買いためた箱入りの文学の本五、六十冊 梅澤鳳舞／読みたい本は限りなくあります。御誌を読むのも喜怒哀楽であります 磯山陽吉／中村草田男 浜田蛙城／「星と祭」(井上靖) 小島岳青／松本清張の「推理小説」北村純一／今、藤沢周平の「回天の門」を読んでいます。山形の清河八郎の話ですが龍馬の時代の人 富樫和子／いままさのように奥の細道を読みたい 吉田末灰／歴史もの 内河邦久／浅田次郎著「終らざる夏」上下 まだ読んでません 浦橋克行／万葉集にふれてみたい 佐野しづ子／長年

の「積んどくの本」もやつとほぼ読み終えたのでインターネットでユースや俳句を又、俳句作品を読むつもり 忍正志／徒然草 神作洗江／「海は甦る」躍動する人物に引きこまれる 長峰正晴／世界の美しい街や生活をつづったエッセイ集 藤本由美子／奥の細道 何度読んでも新しい発見があります 梶鴻風／良寛さんの愛語 松本正／坂の上の雲 司馬遼太郎 郎江 忠城／やはり俳句の本です 田島星景子／源氏物語 湯浅芳郎／日本の歴史関係 池戸喜美子／会津八一「古都巡礼」 須澤重雄／本を読むよりテレビばかり見て居ます 近藤はつみ／推理小説 大阿久雅子／中国の歴史十一月末に西安、北京を旅するので、竹野紀子／河野裕子歌集 辻升人／本棚で眠っているソノ読本 清水喜代子／会津八一の般若心経 小林七重／「漢語日語」興膳宏 岩波新書 川崎洋吉／井上ひさし著 吉里吉里人…など 山川みどり／近現代史(特に日本の) 千代田栄次／「坂の上の雲」全八巻もう一度読みたい 石原学／特になし 野村幸人／旅行記 加藤三陽／鬼平犯科帳 渋谷清／歴史小説 千木良宣行／「浮かれ三亀松吉川潮著 戦前、戦後の江戸芸人の生き様が面白い 中嶋秀次郎／司馬遼太郎シリーズ 南喜美子／ぼんやり画集をながめていたいですね 稲葉民雄／川柳人間 磯野いさむ あのことこのごろの句 高柳閑雲／太宰治を三読五読 福岡悟／法窓夜話 穂積陳重 諏訪杜夫／反哲学入門 木田元戸田英夫／山月記 請開邦俊／只今「乱紋」や、戦国時代、お江について再び読み返しています。来年の大河ドラマ「江」が始まります。大野町の案内人として春から見学者多く、秋も？ 高須孝／いつか読もうと積んである本を一冊でも多く読了するのが課題です 藤沢健二／「言葉の旅する」細川護熙著 津布久信雄／寂聴の源氏物語 今井勝子／漢詩を読み

たいです 春口蓮男／坂の上の雲 一々八巻 伊藤みさ／ひねくれ一茶 田辺聖子著 講談社 園部正次／目下 舟橋聖一全集を読んでいます。この続きがまだまだ 木下精／徒然草 田村淳子／池波正太郎 著作の鬼平犯科帳 油谷郷史／シートン動物記 獣の目が青光る感じが好き 安藤まこと／有名人の句集の本(例えば昔の人) 中嶋清子／源氏物語を原文で読みたい 紺谷睡花／宮沢賢治(内田康夫著)イーハトーブの幽霊 平賀田鶴子／虚子「山家集」 寺尾令子／御伽草子 棚橋麗末／どうしてかわかりませんが雨月物語です 工藤昌見／藤村の「破戒」とか「夜明け前」など古い作品を読み返してみたいと思います 田澤宏／俳句歳時記 大久保アヤ子／銀河鉄道の夜 阿部澄江／司馬遼太郎の「坂の上の雲」 井上静夫／「偶像再興」和辻哲郎著 伊藤修敬／入選作の俳句集「中村草田男や黛まどかの句集」など 杉村美保子／塩野七生の本 例えばユリウス・カエサル(くり返し読みたい)その他どんな著作でも 和田猛／推理小説やサスペンスです。ラプストロームいいな 岡本恵／松本清張 久本にい地／テレビに押され、旅の場面に見入っております。北陸は特にいいですね 佐伯セツ子／やはり恋愛小説 山本直子／坂本龍馬の本 村上千代／来年のNHK大河ドラマ「江」姫たちの戦国「田淵久美子さんの作品をじっくりと読みたいものです。諸田玲子さんの「美女いくさ」は読みました 中村和弘／時代小説(特に藤沢周平、鳥羽亮の作品)鳥羽亮は埼玉県出身の作家 布目雅之／俳句歳時記。名句ぞろいの歳時記あり、頭の体操になる。 居原田連星／細木数子著「運命の絆」火星人の運命(平成23年版) 大川聡／途中で中断している五木寛之著「親鸞」を完読する事 要俊江／リラックスのため本の替りに音楽を聴きます 藤田君江／歳時記しかありません 堀

A Q U E S T I O N N A I R E

たかこ／恋愛もの 貝沼とし子／与謝野晶子の『源氏物語』 寒川靖子／何度読んでも面白い、勉強になる。吉原手引草、松井今朝子著 高野春枝／おくのほそ道 小山たけし／色々あるが差し当たり『源氏物語』しかし、そんな暇あるだろうか 岩村 昇／庭の花、山の花、知らない名前の花が多いので四季の花の本を読んで色々な形姿姿を楽しみにして居ます 谷川利子／「水点」が良かったのか三浦綾子氏の作品に心が引かれます。あらずじはどれと同じ様ですが読む人の心をとらえます 吉野成行／『詩の力』吉本隆明(新潮文庫) 五味田幸夫／親鸞の解説書 中川平治／特にない 鈴木義雄／終らざる夏(上下) 浅田次郎 竹内ハヤ子／鬼平犯科帳 好きな古川柳と読み合せを楽しみに 奈倉榮甫／吉川英治全集 現在読書中 森ふく／山本周五郎全集読みました。又秋の夜長に読んでみます。 中野豊彦／カラー版 新日本大歳時記 愛蔵版講談社 橋本世紀男／不毛地帯(全巻) 山崎豊子著 小野寺裕子／歴史書物(一) 七世紀史実が少ない)ロマンと推理 早川述史／藤沢周平「三屋清左衛門残目録」何へん読みかえしてもたのしい 齊藤安弘／若い時に読んでヘルマン・ヘッセの『郷愁』車輪の下』知と愛を再読 吉村充治／偉人の自叙伝 鏡たか子／軽くて一夜で読み終えられるもの 鰐部好三／秋は特に文化祭、句会(大会)作品展などで忙しく読めないと思いますが、まだ読んでいない句集(川柳)を読めたらと思います 小山恵美子／確かに私も「言葉少なき」人が好きです 小暮昭司／千一夜物語 秋の夜長に読むに最もふさわしい60年ぶりに再読か 高杉杜詩花／随筆:ことは大切になる書 き手の生活などにふれることは楽しい。例「肩の荷」をおろして生きる P H P 新書「日本人が幸せでない理由」上田紀行 他「かけがえのない人間」生きる意味等 能條憲夫／サスペンシブなものか伝記物 福田和子／好きな法然、親鸞、蓮如の本をじっくりと読むが体力が持続しない 佐藤茂三郎／早寝です。夜の夜

長はありませぬ 中野博夫／山崎豊子著沈まぬ太陽、五巻を腰痛手術で三ヶ月入院読破した。二十五周年を迎え又読み返したいと思ふ 阿部幸子／鈴木真砂女の句集 西村けい／俳句縦横無尽 鎌倉佐弓 夏石番矢 著 水川聖子／山本健吉 基本季語五〇〇選 川口襄／芥川賞受賞 乙女の密告 堀田寿美子／寺山修司俳句全集 10年程前神田神保町で買った、思い出の本 本間七窪子／「樞宮尾登美子 木村貞恵／夏井いつき、絶滅寸前季語辞典(ちくま文庫) 大井光隆／司馬遼太郎作『播磨灘物語(四)』を今読んでいます。これが終れば好きな時代物ですね 大岩歌子／百人一首に関する本です 山岸伊久雄／詩集 人間の詩 池田大作 小田佳代／上田秋成『雨月物語』 矢野絹枝／何かいい本ないでしょうか? 桑原謙一／痛快時代小説(活字大目文庫本) 羽根田明／萩原朔太郎著(詩)『月に吠える』 安木沢修風／永井路子の本なら何でも、特に「美貌の女帝」奈良への遷都思う 竹澤茂子／尾崎放哉の句集 北野耕兵／芥川龍之介全集 上谷すみゑ／龍太語る 飯田龍太著 木村真澄／坂本竜馬を始め歴史物をあさっています 秋山貞治／姜尚中氏の『母オモエ』です 村松知津子／波多野爽波全句集、何としても読み通したいと思つています 佐藤 信／話題の新刊 最後の言葉(講談社) 五十嵐勝敏／物理学者 寺田寅彦の『俳句と地球物理』まだこの本には触れる機会がない。あたらである 野中よしみ／学生の頃買った太宰と、古典随想 長尾俊彦／夜長に読書の経験はあまりない、「会津士魂」(全十三巻)は中途で長く止めていたので、龍馬伝」との関係もあり読もうと思つて 菅井文男／俳句の季語参考書など、読み直してみたい 炭崎博／人それぞれにの来た途、人生観の溢れた句集 田野井一夫／澤地久枝さんの『ツセ』は、書店で3冊求めましたが、さて何冊クリアできますか? 奥那於子／藤沢周平の本 藤沢今日民／夢枕獏 沙門空海唐の国にて鬼と冥す 今井

温子／知多半島の民話 早矢仕那夫／『日本の名随筆』全20巻、特に「夢」(14)傑作作品社 萬濃の子／リラダン全集 松木建二／最近話題になり購入した本、長編なので何とかこの秋に。又俳句にまつる本にも目を通したいです 井田由利子／田淵久美子「江」姫たちの戦国」吉田ひろし／1 Q 8 4 長島保子／心やささえNHK月刊誌「ラジオ深夜便」のエッセーを 藤井春三／芥川龍之介作品をじっくりと読みたい 堀井 和／徒然草 大西敏正／ダンテの神曲 鈴木与平／宮本輝の作品 池田 岬／暑い秋の夜にいま読んでいます。本は①『女流関川夏史著、私だけの映画史』古谷網正著 北村富士雄／『野菜の育て方』とか「茸」なのですが年齢のせいで眠くなるばかりでハカドリません 重原昇／井上靖「天平の薨」北嶋八重／古事記 高松ゆか／絵のない絵本」を又読み返してみたいです。大橋絵代／鬼平犯科帳(池波正太郎作)人情味溢れる作品の魅力 古谷力／龍馬がゆく」安達輝美／野ざらし紀行 近藤美好／読みたい本はいろいろありますが、視力に限界が... 池本勇／どんな本でも読みます 大窪美代子／宮本輝 三千枚の金貨 中林恵子／温古知新じゃやないが、古典を片端から読破したいと思うもの、これが中々難行です 佐藤政實／アガサ・クリスティのシリーズ 木田亜津子／源氏物語 堀井酔人／福沢諭吉 学問のすゝめ(再読)万葉集(再読)古今集(再読) 延原令岱／枕草子を読み返してみたいなどと

増本和子／復本 一 郎著講談社現代新書 俳句とエロス 仁藤ひろじ／芭蕉の誘惑」嵐山光三郎 岡村君枝／本年の国文祭は岡山県赤磐市は、詩担当、よって「長崎清子」の詩集を読み直す 森崎榮久／俳句の本 廣瀬喜代子／地元の歴史を伝えるもの、20分て読めるもの 美濃部絃三／新聞を見る位で最近長編を読んでいません。テレビをみてると終つてしまふ感じですが 田中豊恵／吉田未灰先生句集「恬淡」 門井美豫／今年には彼岸すぎても暑いとかで本読みの元気が

でるかな? 岸田晴代／藤沢周平の本を読みたいと思つています 三浦八千代／秋の夜長ゆつくりのんびり論語の素読 出井静枝／歳時記の秋の部 若林卓宣／古典が読めたら... 鈴木みえ／日本人のルーツ 古事記よりずっと前の事を読みたい 畑克明／真田太平記を読み直したいと思つています 吉澤昌美／先人の名句をたくさん読んで勉強したい 新井竜才／太宰治や三島由紀夫、変わったものでは吉川英治の三国志等を読み返して見たい。忙しくて時間を取れるかどうか問題です 大下志峰／水木しげるの本 藤沢樹村／瀬戸内、源氏物語に読めるかどうかが疑問でいっぱい 野原香雪／徒然草 山崎鶴恵／源氏物語(以前谷崎源氏を読んだので与謝野晶子訳を) 岩崎令子／失敗の本質(中公文庫)日本軍の組織的研究、ノモンハンから太平洋戦争、いくさに負けたから書けるのだと思うがその本質と今日、いま現在何をすべきかでありましよう 神一男／宮沢賢治を改めて読みたい 村上幸枝／吉田一穂詩集 野中信夫／倉田紘文花神俳句館) 須田洋子／もちろん詠み人応援マガジン 安部龍太／関西はまだ記録的な酷暑の中なのでもう一度「敗北を抱きしめて」を読み返したい気分です 中山日出子／ラジオ深夜便 宇田川正雄／渡辺淳一さんの「君も雛罌粟われも雛罌粟」濱田深雪／最近集中力もなくなつて加齢と共に駄目です!! 柳澤京子／失われし時を求めて 中島久光／小林秀雄 本居宣長 行方素芳／藤村の「夜明け前」世相は何やらそんな感じだ 針ヶ谷里三／愛読書は「サザエさん」 杉浦俊雄／推理小説 高垣勝代／歴史小説 針生清／平家物語他、古典の数々 米山孝志／名句と言われ

る句集など 駒場京子／「複眼の映像橋本忍著(文春文庫)俳句に忙しく遊びに忙しくの現状 岡本伸／村上春樹の作品 石川郁子／葦舟) 山口京子

るかな? 岸田晴代／藤沢周平の本を読みたいと思つています 三浦八千代／秋の夜長ゆつくりのんびり論語の素読 出井静枝／歳時記の秋の部 若林卓宣／古典が読めたら... 鈴木みえ／日本人のルーツ 古事記よりずっと前の事を読みたい 畑克明／真田太平記を読み直したいと思つています 吉澤昌美／先人の名句をたくさん読んで勉強したい 新井竜才／太宰治や三島由紀夫、変わったものでは吉川英治の三国志等を読み返して見たい。忙しくて時間を取れるかどうか問題です 大下志峰／水木しげるの本 藤沢樹村／瀬戸内、源氏物語に読めるかどうかが疑問でいっぱい 野原香雪／徒然草 山崎鶴恵／源氏物語(以前谷崎源氏を読んだので与謝野晶子訳を) 岩崎令子／失敗の本質(中公文庫)日本軍の組織的研究、ノモンハンから太平洋戦争、いくさに負けたから書けるのだと思うがその本質と今日、いま現在何をすべきかでありましよう 神一男／宮沢賢治を改めて読みたい 村上幸枝／吉田一穂詩集 野中信夫／倉田紘文花神俳句館) 須田洋子／もちろん詠み人応援マガジン 安部龍太／関西はまだ記録的な酷暑の中なのでもう一度「敗北を抱きしめて」を読み返したい気分です 中山日出子／ラジオ深夜便 宇田川正雄／渡辺淳一さんの「君も雛罌粟われも雛罌粟」濱田深雪／最近集中力もなくなつて加齢と共に駄目です!! 柳澤京子／失われし時を求めて 中島久光／小林秀雄 本居宣長 行方素芳／藤村の「夜明け前」世相は何やらそんな感じだ 針ヶ谷里三／愛読書は「サザエさん」 杉浦俊雄／推理小説 高垣勝代／歴史小説 針生清／平家物語他、古典の数々 米山孝志／名句と言われ

るかな? 岸田晴代／藤沢周平の本を読みたいと思つています 三浦八千代／秋の夜長ゆつくりのんびり論語の素読 出井静枝／歳時記の秋の部 若林卓宣／古典が読めたら... 鈴木みえ／日本人のルーツ 古事記よりずっと前の事を読みたい 畑克明／真田太平記を読み直したいと思つています 吉澤昌美／先人の名句をたくさん読んで勉強したい 新井竜才／太宰治や三島由紀夫、変わったものでは吉川英治の三国志等を読み返して見たい。忙しくて時間を取れるかどうか問題です 大下志峰／水木しげるの本 藤沢樹村／瀬戸内、源氏物語に読めるかどうかが疑問でいっぱい 野原香雪／徒然草 山崎鶴恵／源氏物語(以前谷崎源氏を読んだので与謝野晶子訳を) 岩崎令子／失敗の本質(中公文庫)日本軍の組織的研究、ノモンハンから太平洋戦争、いくさに負けたから書けるのだと思うがその本質と今日、いま現在何をすべきかでありましよう 神一男／宮沢賢治を改めて読みたい 村上幸枝／吉田一穂詩集 野中信夫／倉田紘文花神俳句館) 須田洋子／もちろん詠み人応援マガジン 安部龍太／関西はまだ記録的な酷暑の中なのでもう一度「敗北を抱きしめて」を読み返したい気分です 中山日出子／ラジオ深夜便 宇田川正雄／渡辺淳一さんの「君も雛罌粟われも雛罌粟」濱田深雪／最近集中力もなくなつて加齢と共に駄目です!! 柳澤京子／失われし時を求めて 中島久光／小林秀雄 本居宣長 行方素芳／藤村の「夜明け前」世相は何やらそんな感じだ 針ヶ谷里三／愛読書は「サザエさん」 杉浦俊雄／推理小説 高垣勝代／歴史小説 針生清／平家物語他、古典の数々 米山孝志／名句と言われ



●お客様の「リレーエッセイ」

韓流にはまるわけ

江葉恭子

ヨン様から始まった韓流ブームは、ドラマ、映画にとどまらず、K・POPと幅を広げ、今も尚、日本のファンを魅了し続けている。

もともと欧米の音楽や映画が好きだった私は、韓流ブームに乗ることもなく、ただ客観視しているだけだったが、最近知り合った友人がどっぷり韓流にはまっている人で、彼女が話すことと言えば、今、大ファンの男性POPグループのことばかり。ひっきりなしに動画やサイトのURLをメールで添付して送ってくる。これは何か感想が聞きたいのだろうか、それならば目を通さないわけにはいかない。仕方なく一度は観てみる。なるほど確かに皆、長身でバランスがいい。そして何より真面目に(?)歌い踊っている。

彼等から伝わってくるのは、一生懸命感。とにかくひたむきに練習を重ねて、この歌とダンスを公に披露出来るところまで完成させたのだろうと思えるのだ。日本語を丁寧発音して歌う歌詞は聞き取りやすい。覚えてたの日本語でどこちなく話している時の健気さは愛しくさえある。皆、色が白くてとても美しい。清潔感が漂っている。礼儀正しいし、品格も備わっている。

数年前のブームが始まった頃、これはなぜだろうと私なりに考えて

みた。その結果出てきた結論は「回帰」であった。優等生なのだ。おばさまがはまるのはそこである。酸いも甘いも経験していききた女性たちは、そういう無垢な男性を観ていたのだ。現実に関われる距離になつてしまうと、幻滅し失ってしまうモノ、そこに素晴らしい瞬間があるのだ。夢が幻滅に変わっていくばかりの日常、それを忘れさせる輝きがアイドルには必須である。でも、今や日本のアイドルには殆ど残っていない。新人でさえ、どこか既に汚れちゃっている感じがする。カッコいいという概念が、ちよいつ風潮に定着してしまっている。だから今の韓国のアイドルが持ち合わせている幼さのような清潔感、日本のアイドルから見れば、真面目すぎてダサいとなるのかもしれない。

だけど、そもそも芸能人とはこうあるべきなのではないだろうか。距離感があり、虚像でいいのだ。だからこそ、個々に想像力を働かせて、思い切り美化し、乙女のように心をときめかせることが出来るのだ。隣のお姉さん、お兄さんのような親近感は必要ない。なぜならきれいなお姉さん、カッコいいお兄さんは、現実に近所に存在するのだから。

改めてヨンを考えてみる。なるほど、彼にはオーラがある。微笑んだ美しさ。こういう俳優は今の日本には存在しない。

この夏から韓流ガールズなるガールズグループが次々と日本デビューを始めている。彼女たちも美しい。セクシーさがありながらいやらしいくない。でもなぜかファン層は若い女性。さきの友人はいう。「日本男子はロリコンだから。」なるほど納得。日本男子が夢中になるのは少女たち、でしたね。

新潟ぶらり

＊旧齋藤家別邸



旧齋藤家別邸は、新潟の三大財閥の一つであった四代齋藤喜十郎（1864～1941）が、大正期に建てた別荘。

まずは建物の中へ。大広間を通して広がる庭の景色。街の喧噪から一変、空気が清くなり、お寺のような落ち着いた雰囲気。窓が開放的で、砂丘の地形を活かした庭を建物の中から楽しめる。

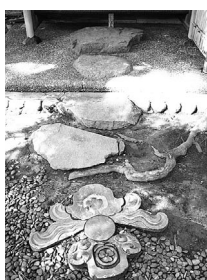
庭の木々は、全部が一気に色づくのではなく、緑、黄、オレンジ、赤、深い赤等、さまざまな色のハーモニーが楽しめるように設計されている。うかがった時は、一部がほんのりオレンジ色になり始めたかな、というところだった。秋深まる頃が楽しんだ。

庭に出て散策してみると、この庭をより楽しむことができる。飛石や池の

橋を渡り、砂丘の階段をのぼっている

と、ちよつとした登山気分になった。砂丘をのぼりきると茶室「松鼓庵」がある。その前には巨石があつて、ちよつど庭を見おろすようになっていて。この石は、江戸の庭園から運ばれてきたと言われている。当時は、万代橋が木造だったため新潟駅から運んでくるのに1ヶ月もかかったとか。今ではいい具合に苔むして、庭の主という感じだ。また茶庭入口には鬼瓦が飛石として使われている。これは、コレクションとして収集されたものを、家紋を消して使っているとか。齋藤家の鬼瓦も飛石になっていて、これは、かたばみの家紋が消されずに使われている。他にも灯籠や根上り松などがあり、パンフレットを見ながら一つ一つ探してみるのも楽しい。

お屋敷の中から幽遠な景色を楽しみ、細部の意匠も堪能しながら庭を散策。秋の空気を贅沢に楽しめるひとときだった。



▲鬼瓦の飛石
（仲由真実）

住／新潟市中央区西大畑町576番地
☎／025・2226・2575
運営協力金／300円（高校生以上）
開館時間／10時～17時

（10月以降は16時まで）
※公開日のみに限り開放
※公開は2010年11月28日でいったん終了

＊千歳大橋と月

千歳大橋[※]。信濃川にかかる橋で、近くには新潟県庁がある（ちなみに、河口から順にみていくと、柳都大橋、萬代橋、昭和大橋、千歳大橋となる）。竣工は一九八五年。華々しい萬代橋にくらべ、千歳大橋はわりあい静かな橋である。あるいて渡る人も、それほど多くない。千歳大橋に、新潟出身の歌人・會津八一の歌碑があることは知っていたが、いつも車で通るだけで、じっくりとみたことが、実はなかった。

よをこめて あかくみはなち おほかはの このてるつきに ふなですらしも
（典故「鹿鳴集」「望郷」）
「夜おそくまで舟底にたまった水を汲み捨てて、照りわたるこの月の下で信濃川に舟を出そうとしているよ。」



月明かりにうかぶ水の都・新潟。八一にとつてのふるさとの風景が、橋に刻まれている。

照りわたる月の下、静かな千歳大橋をあるいて渡ってみたらさぞすてきなことだろうと思った。しかも、ちよつど

十五夜である。いそいそと出かけた。風が強く、空は曇っている。途中で雨が降ってきた。

どうやら十五夜はあまりすっきりしない夜空であることが多いようだ。十五夜に曇って月が見えないことを「無月」、雨が降って月が見られないことを「雨月」と呼ぶ。月が見えなくとも、どこかほの明るい空を賞したり、侘しい気持ちに暮らせたりと、それぞれの風情を味わう古人には驚かされる。

対して十三夜は、晴れることが多いらしい。「十三夜に曇りなし」という言葉まであるそうだ。今年の十三夜は、十月二十日。ちよつど弊誌が皆さまのお手元に届く頃である。果たして、晴れているか、どうか。

ちなみに十三夜というのは、日本独特のお月見の習慣で、十五夜の「中秋の名月」に対して「後の月」などと呼ばれる。古くからの習慣のようで、徒然草や源氏物語の夕霧の巻などにも十三夜の記述があるという。

様々な月を愛で、月のある夜も、ない夜も、その風情を楽しむ。月を待ち、その待つという時間さえも楽しむ。秋の夜は、おだやかな楽しみがたくさんある。古人にならない、私も次のお月見・十三夜を楽しみたい。

（菅真理子）

※新潟市中央区の信濃川に架かる国道116号、国道289号、新潟県道16号新潟亀田内野線の道路橋梁。

三つ目のこと

森賀まり



俳句を始めたばかりのころ、俳句には読んで味わうことと自分が作ることのほかに続けてゆくことがあると知った。これがけっこう難しい。

俳句を始めるとき、しばしば結社という集団に入ることや定期的な句会に参加することをすすめられる。それらはみなひとりで続けていくことの難しさのゆえだ。なぜ難しいのか。それは俳句を作ることがとてもささやかで個人的な行為だからだ。小さな手帳を開いて文字を書きつける。誰かのための労作でないから後回しになる。

振り返ってみれば、私の場合最も危なかったのは家族の病気などいかに深刻な事態ではなく、俳句との関わりが浅いころ、出産のために仕事を辞めたときだった。世界はずんと小さくなった。

そのころ夫と二人で句会をした。いや「句会」とは呼んでいたが正確ではない。所属していた結社の句会に翌日彼だけが行くという夜、季語を提案し合って原稿用紙に句を作つてゆく。行が埋まったら交換してお互いに丸をつけた。当時俳句と私は、結社と句会と夫のおかげでなんとか繋がっていたと言える。定期的な締切りの有難さよ。季語は季節を淡々と回していた。

そのときは気づかなかつたけれど、自分が後回しの暮らしは消極的ながら季節を再発見してゆく日々でもあった。赤ん坊を抱いてあるいは寝かしつけてから、身の回りの小さな発見を詠んだ。

前回の1回目のエッセイには「俳句の本質を見事にとらえている」「書く、ことの意味、奥深い世界を垣間見た」「うなずきながら読んだ、次も楽しみ」などの感想をたくさんいただきました。今回も…味わい深い内容です。

同じころ俳句を詠むことを意識的にやめてしまった女性俳人がいたことを知った。

ひとりゐるて刃物のごとき昼と思ふ
藤木清子

しろい昼しろい手紙がこつんと来ぬ
〃

現実から浮き上がった自我と乾き。先の句のような孤独の色濃い作品をのこして、ある日彼女は俳句をやめてしまふ。昭和十五年のことである。
現実の深い孤独以外にも彼女自身の中に俳句という自己表現を遠ざけざるを得なかったものがあつた。自我という枠の中で彼女はひとり言葉を探し疲れたのだろう。俳句には様々あるが、私は藤木清子が俳句を離れた一因に無季ということがあつた気がしてならない。

季語はただの言葉ではない。俳句は季語がある限りどんなに孤独であつてもその世界は完全には閉じない。季節は移りゆくものであり、季節をうたう限り常に現在と繋がっているから。そう気づいた。

俳句を始めたばかりの人がまず目を開かれるのは自分のよく知るはずの季節の発見だろう。俳句を続けるほど身の内に季節が蓄えられてゆく。新しい季節が呼び起こすものがある。それらはある日ふいに宝物のように輝いてみせるだろう。

自分のために何かを続けることは一般に難しい。けれど俳句に限つて言えば長く続けるほど大切になる。うけあいである。

●プロフィール

昭和35年愛媛県生まれ。波多野爽波、大串章に師事。「青」のほか、「水無瀬野」「ゆう」に参加。現在「白鳥」同人、「静かな場所」代表。句集に「ねむる手」「瞬く」。詩集「河へ」。田中裕明との共著「癒しの一句」。第三十三回俳人協会新人賞を受賞。

編集後記

4月の第1回佐渡トキマラソンに続き、10月10日新潟シティマラソン10kmに参加する。小・中・高と陸上部だったとはいえ主に短距離。高校時代、日本海沿いの松林を走る恐怖の長距離走は、高跳びのMちゃんと途中ワープをして近道。見つかって先輩の超ド級のカメラが!!その彼女を誘つての今回の参戦。「何の因果で私たちが…あの時の罰かねえ」と、朝一緒に走りながら笑えてくる。あれから30年弱、Mちゃんも離婚を経たりと色々あつた。お互い少しはこらえ性がついたかな。夜は完走と今までの人生に乾杯をあげなきゃね。(木戸敦子)

2010. 10. vol.52 (2010年10月10日発行/隔月発行)

●発行・印刷/株式会社ミュージズ・コーポレーション

〒950-0801 新潟市東区津島屋 7-17

TEL 025-250-9555 FAX 025-250-9550

喜怒哀楽書房

株式会社ミュージズ・コーポレーション

☎ 0120-819-395

e-mail odp@eseihon.com / HP http://www.eseihon.com